

氏名	王 宜 瓊
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 3977 号
学位授与年月日	平成13年 3 月23日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	魏晉南北朝詩歌テーマ論
論文審査委員	主 査 教 授 齋藤 茂 副主査 教 授 山口 久和 副主査 教 授 村田 正博

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国の魏晉南北朝期における詩歌のテーマ類型について、各時代毎の分析を通じてその形成と変遷の状況を考察し、詩歌発展の歴史をテーマという角度から解明しようと試みたものである。総論と各論から成り、総論ではテーマの種類、内容、および特徴について論じ、各論では代表的な三つのテーマを取り上げて分析を加えている。

総論の第一篇「魏晉南北朝時代の詩歌テーマ論」では、まず当時のテーマの概念のあり方について、①文学論的な著作、②詞華集における分類のあり方、③模擬作などの三種類の資料から検討している。①では『宋書』の「謝靈運伝論」などの文学史論と、劉勰『文心雕龍』などの文学理論書とを挙げ、いずれもテーマについて言及しておりながら、系統的な分析と総括はなされていないことを指摘している。②では『文選』と『玉臺新詠』を取り上げ、共にテーマ意識をもって変纂されていることを指摘している。③では模擬詩が当時広く作られていたことをまず指摘し、その上でそれらが既存のテーマを模倣、踏襲していること、そして作者達はテーマ類型を見分け、その本質をつかむ能力を培っていたことを指摘している。これらの検討を踏まえ、筆者は当時のテーマの概念に関する顕著な特徴として、次の二点を挙げている。一点は「テーマ」を指す術語が無く、形式や風格を表す「体」の語が借用されていることで、それはテーマに対する意識は高まっていますが、概念が明確化するまでには至っていなかったためと、筆者は判断している。もう一点は当時のテーマ概念が分類を中心として発展し、その実用性のみが重視されて、テーマの由来、特質などの理論的な探究はほとんど行われていないことである。文学形式に関しては、理論的探究が比較的活発に行われていただけに、このことはテーマ概念が作品の考察における主たる要素として成熟していなかったことの表れと、筆者は指摘している。

第二篇「魏晉南北朝各時期の詩歌のテーマ類型及び特徴」では、まずテーマ分類の基準について論じ、伝統的な分類と後代の系統的な分類とを比較検討し、さらに他の研究者の議論も踏まえた上で、本論文での基準を定めている。その上でテーマ類型の分布状況について、建安、正始、西晋、東晋、劉宋、齊梁陳、北朝の七期に分けて仔細に検討している。そして、この間に宴遊、山水、詠懷など十六種類のテーマ類型が生まれ、発展したことを明らかにしている。各時期のテーマ類型の展開は、かなり複雑な様相を呈しているが、筆者は多数の作品を例示しつつ、時代背景や作者の個性をも踏まえて、個々のテーマの形成と変遷の経緯を詳細に分析している。そしてこれらを総合する形で、最後に魏晉南北朝期の詩歌テーマの特徴として、次の二点を指摘している。一点は抒情的テーマと描写的テーマが中心で、かつ晋と宋を境にそれぞれ前後期に分かれていることである。筆者によれば、抒情的テーマは、前期では社会や人生に対する感慨が主であったのに対し、後期では次第に個人的な感情に重きが置かれるようになっており、また描写的テーマでは、前期は山水など自然物を描くことが多いのに対し、後期には次第に身近の日常的な用具、及

びその用具に関わる女性の様子などに興味が移ってきているという。つまりいずれの場合も、大きな対象から小さな対象へ、遠いものから近くのものへと関心が動いていると指摘する。もう一点は、貴族社会での社交的な文学という要素を濃厚に持っているということである。これは詩歌に限らず、魏晉南北朝期の文学の全般的な特質であるが、それがテーマの選択においても強く働いていることを筆者は明らかにしている。七期を通じて、君主や貴族を中心とした文学集団が主導的役割を果たしていたが、一つにはその集団性がテーマ選択において多数指向をもたらし、時期毎の流行を生み出したこと、二つには貴族文学の遊戯性が娯楽的なテーマの形成、発展を促進した面があることに、筆者は特に着目している。

各論では、挽歌、遊仙、搗衣の三つの個別テーマを取り上げる。まず「挽歌詩の変遷と定型化」は、「テーマの性格の時代的变化について」という副題が有り、葬礼の中から生まれた挽歌詩が抒情的テーマとして独立し、その後再び葬礼の一要素として復帰していった経緯を明らかにする論考である。同一のテーマでも、時期によって創作動機、内容、様式など様々な点で大きく変化することが有ることを示した例であるが、筆者は同時に、変遷が定型化へと向かう流れを持つことにも着目しており、北朝で形成された五言八句の贈呈挽歌が、後世の挽歌詩の定型的様式となったことを注目点として指摘している。

「遊仙詩と魏晉詩人の精神世界」は、「テーマと内面表現の固定的関係について」という副題があり、魏晉期に多くの詩人達によって作られた遊仙詩に、共通した内面表現が見られることを明らかにする論考である。筆者は隠逸詩との比較を通じて、遊仙詩に強い自己主張が認められることを指摘し、また創作動機は個々に異なっておりながら、共通した感情が表出されている点に、このテーマの大きな特徴を見出している。

「搗衣テーマの構造の考察」は、「テーマの因襲模倣の意義について」という副題があり、搗衣テーマが時代を越えて継承されていること、及びその理由と意義とを明らかにした論考である。このテーマは、一人暮らしの女性が衣を搗きながら夫または恋人を思うという閨房詩であるが、そこで描かれる情景も、晩秋初冬の月夜という共通点を持ち、砧の音、搗く冬着なども詠歌される対象として、おおむね襲用されている。筆者は多くの作品を引用しつつ、その相互の模倣、継承の関係について仔細に検討を加えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は総論と各論の二部構成であり、総論と各論のそれぞれに即して論評を加える。

総論の第一篇「魏晉南北朝時代の詩歌テーマ論」では、当時のテーマの概念のあり方について、文学史論や文学理論書における論及、詞華集における分類のあり方、模倣作の作られ方という三点から検討しているが、文学理論書や詞華集のみならず、模倣作も同等の資料として扱い、仔細な検討を加えたことは筆者の高い見識を窺わせる点である。そして筆者は、当時のテーマの概念に関する顕著な特徴として、「テーマ」を指す術後がまだ無く、形式や風格を表す「体」の語が借用されていること、および当時のテーマ概念が分類を中心として発展しており、その実用性のみが重視されて、由来や特質などの理論的な探究がほとんど行われていないことの二点を指摘するが、これは当時のテーマの概念を知る上での要点と言えるものである。中国における文学の理論的な探究は、魏晉南北朝期に大きな発達を見せ、劉勰の『文心雕龍』などの体系だった理論書を生んでいるにも関わらず、テーマの理論的探究が余り進んでいないのは、筆者の指摘のように、作品の制作やその鑑賞という実用的な側面でテーマ類型が重視されるに止まっていたからであろう。当時テーマに対する意識は高まっていたが、その概念はなお明確化されておらず、作品の考察における主たる要素として認められるまでには成熟していなかったという筆者の結論は、十分首肯できるものである。

総論の第二篇「魏晉南北朝各時期の詩歌のテーマ類型及び特徴」では、伝統的な分類と後代の系統的な分類とを比較検討し、他の研究者の議論も踏まえた上で、本論文でのテーマ分類の基準を定め、その上で

建安、正始、西晋、東晋、劉宋、齊梁陳、北朝の七期に分けて、この間に生まれ、発展した宴遊、山水、詠懷など十六種類のテーマ類型の分布状況を検討している。テーマ分類には様々な見方が可能であり、現代の研究者の間でも概括するか細分化するかで意見が分かれているが、筆者は伝統的な分類をも踏まえた上で十六種類に分かっており、今後の研究に一つの指針を示したと言えるであろう。齊梁陳期が相対的にやや簡略な印象は有るが、分析的確であり、各時期の特徴が明瞭に示されている点は高く評価される。筆者はこれら個別の検討を統合する形で、魏晉南北朝時代の詩歌テーマの特徴として次の二点を挙げている。一点は、抒情的テーマと描写的テーマが中心で、しかも晋と宋を境として前後期に分かれていることであり、そのいずれも大きな対象から小さな対象へ、遠いものから近くのものへと、前後期で関心が動いていることを指摘する。この指摘は、当時の文学全般の流れを考える上でも貴重な意味を持つものであり、筆者の識見の高さを窺わせている。もう一点は、貴族社会での社交的な文学という要素を濃厚に持っているということだが、筆者は貴族文学として大括りせず、個々のテーマに即して冷静に分析を加え、その選択に表れた社交文学的な要素に着目した点は、高く評価できよう。また貴族文学の持つ遊戯性を取り上げたことも、南北朝期に続く唐代での発展を考える場合に、大いに参考となる指摘である。

各論のうち、「挽歌詩の変遷と定型化」では、葬礼の中から生まれた挽歌詩が抒情的テーマとして独立し、その後再び葬礼の一要素として復帰していった経緯を明らかにしている。挽歌は時期によって様式が大きく変化したテーマであり、それぞれを別個のものとして切り離して考えるべきであると説く研究者もいる。しかし、敢えて同一の流れとして捉え、かつ定型の確立に論及した点は、本論の大きな功績である。墓誌銘などの文章でも、北朝がその発達に大きな役割を果たしたことが指摘されており、葬礼に関わる詩文いずれにも北朝の文学が深く関わっていたことが明らかになった意義は大きい。

「遊仙詩と魏晉詩人の精神世界」は、魏晉期にさまざまな詩人達によって作られ、別個の創作動機を持つ遊仙詩に、共通した内面表現が見られることを明らかにした論考である。遊仙詩が魏晉期の人々の精神的な有り様と深く結びついたものであり、人々の精神面の変化から、やがて遊仙詩が変質し、隱逸詩などへと変わっていったことを明らかにしたことは、遊仙詩のみならず、詩人とテーマの関係を考える上でも、貴重な示唆を与えてくれるものと言える。

「搗衣テーマの構造の考察」では、搗衣というテーマが安定した構造を持ち、時代を越えて継承されたことを明らかにし、その理由と意義についても合わせて論じている。筆者は多数の作品を例示しながら、晩秋初冬の月夜、孤独な女性という設定、及び砧の音や冬着などの描写が、このテーマのポイントとして襲用されていることを指摘し、作品相互の模倣、継承の関係についても仔細に検討を加えている。それによって、挽歌詩とは異なったテーマの発展、継承の状況が浮き彫りにされており、個々のテーマの持つ多様性を例示することに成功している。

以上のように、総論では四世紀に亘るこの時期の状況と特徴を概述し、各論で個別のテーマに即してその間の変遷と発展の状況を検討しているが、多くの作品に対する詳細な検討を踏まえて論じられており、筆者の高い識見を示すものとなっている。詩歌のテーマに関する総合的な研究は従来あまり活発ではなく、初歩的な整理に止まっていた。その意味で、本論文が本格的な解明を試みた意義は極めて大きいと言える。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。